
子豚にジュエリー

ショート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子豚にジュエリー

【Nコード】

N4542G

【作者名】

シヨート

【あらすじ】

とある田舎町に住む中学生5人組が「ディアー」というシヨッピングセンターと戦う物語です！5人のメンバーに代名詞をつけるとするなら、『怠け者』『番長』『お姫様』『天才』『チビすけ』になるという、かなり個性的なキャラたちが主人公です！青春モノでありながら、コメディや恋愛の要素も交えていこうと思っています。ぜひ読んでみてください！

その1「無謀な決意」

どんよりと曇った空を見上げながら、千昭はため息をついた。

吐いた息は真っ白になり、やがてはゆらゆらと消えてしまった。

寒さに身をこわばらせながら、千昭は玄関先に立ち尽くしている。

約束の時間に遅れている友人を、今か今かと待ちわびているのだ。

ぼんやりしていると、遠くのほうからかすかに自転車をこぐ音が聞こえてきた。

真上に上がっていた視線を音のするほうに向ける。

形のハッキリしない影は千昭のほうへぐんぐん近づいてくる。

やがてはそれが力也であると分かると、千昭は声をかけた。

「遅いぞ。何してたんだよ？」

力也を乗せた自転車は、千昭の前まで来ると急ブレーキをかけて止まった。

季節は11月の後半だというのに、力也はかなりの汗をかいていた。いつもと違う様子の力也を見た千昭は、とてつもなく嫌な予感がした。

ゼエゼエ喘いでいる力也の顔には怒りの表情が色濃く出ており、ただ事ではないな、と千明は思った。

「話の中に入ってからだ」

力也はそう言うと、そこがあたかも自分のうちであるかのように千昭の家に入っていた。

少し遅れて、千昭も黙って後に続いた。

千昭が部屋に入ると、すでに力也はコタツに腰を下ろしていた。

パタンとドアが閉まる音が散らかった部屋に響き渡り、力也が口を開いた。

「待たせてしまって悪かったな」

力也が素直に謝ったものだから、千昭は心底驚いていた。

普段の力也なら、絶対に自分から折れることなどない。

千昭が心の中で驚嘆して口をパクパクさせていると、力也は言った。「遅れたのは事実だが・・・それはおれのせいじゃないんだ」

千昭は思わずため息をついた。

力也の態度に感心していた気持ちはどこかに消えうせてしまった。

「言い訳なんて聞きたくないよ」

「だろうな。だが今回だけは聞いてもらわないと困る」

力也の目は真剣そのもので、口調は明らかに厳しかった。

こういう時の力也は誰がなんと言おうと自分の意見を曲げない。

力也とは昔からの付き合いであったため、千昭はその事をよく理解していた。

話を続けてくれと千昭が手でうながすと、力也は待ってましたとばかりに語りだした。

「約束の20分前には家を出たんだ」

力也の家からここまでは、自転車で10分かかるとかというくらい距離だった。

「それが本当なら30分も遅刻するわけがないだろ」と千昭は言った。

「まあまあ・・・話は最後まで聞けって。」

来る途中でふと思ったんだ。

どうせ遊ぶんならお菓子とかジュースがあったほうがイイってな。

それでおれはディーアに寄ることにしたんだ。

スナック菓子とジュースを持ってレジに並んだ。

ここまでは順調だったんだよ。ここまではな。

ああ、今思い出しただけでも腹が立つぜ。あの野郎。

会計が済んで、ツリを渡されたんだ。そこでおれは気づいた。

550円あるはずのツリが450円しかなかったんだ。100円玉が足りないわけさ。

それでおれは言ってやったよ。『ツリが足りねえぞ』って。

そしたらあの女・・・きつとパートだ。まだ若かった。中々の美人だったがまあいい。

パートのやつ、なんて言ったと思う？『さっさと消えろ、クソガキだぜ？』

客に向かってなんて態度だ。信じられるか？おれは頭にきて大声でわめき散らした。

パートの野郎も負けじと言い返してきやがった。そりゃもう、すこいもんだったよ。

そんなわけでおれたちがギャーギャー騒いでたからだろう。

しばらくすると店長が出てきやがった。ああそつさ。あの馬顔のいかつい男だ。

『ツリが1000円足りない』っておれは言ったんだが・・・

パートのやつが『お釣りはちゃんと渡しました』って大嘘つきやがった。

おれは店長に連れられて、奥の部屋に入ったよ。

ダンボールがたくさん積み上げられてて、妙に薄暗い部屋だった。

謝ってちゃんと1000円をくれるのかと思ったら、とんでもない！

店長はおれの言うことなんかこれっぽっちも信じてなかったんだ。

おれのモミアゲをつまみ上げてこう言ったんだ。ものすごい痛さだったぜ。

『ツリが足りないだと？生意気なガキめ。嘘ついてんじゃねえよ』ってな。

店長はしばらくおれの顔を探るように見てたんだが・・・

やつはおれの胸元のポケットに入っているガムに気付きやがった。

ちゃんと金を払って買ったものだよ。

確かにおれは不良のクズかもしれんが万引きなんてやったことはない。知ってるだろ？

それなのにアイツ、おれがこのガムを万引きしたみたいに言っ
てきたんだ。

こめかみはずっと引っ張られたままで痛かったし、部屋は気がな
くて恐ろしかった。

おれはもう、引き下がるしかなかったんだ。

あわててディアーから飛び出して、そしてここに来たんだ」

力也は話し終わると、コタツにげんこつを叩きつけた。

強烈な怒りのためか、力也の首下はぶるぶる震え、目は異様にギラ
ギラと光っていた。

しばらく二人は黙ったままお互いを見つめていた。

気まずい沈黙に耐え切れなくなった千昭はこつ尋ねた。

「それで…どうするつもりなんだ？」

「決まってるだろ？ディアーをぶつ潰してやる」

相変わらず力也の目は激怒したままだったが、口元だけはニヤリと
笑っていた。

その1「無謀な決意」(後書き)

読んでくれて、どうもありがとうございました。

この間中学を卒業し、今は春休み中です。

だから小説でも書いてみようと思い、チャレンジしてみました。
アドバイスがもらえるとうれしいです！

その2「行動開始」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

ありえない仕打ちを食らったディアーに、力也は復讐することを考えます。

力也の親友である千明は、仕方なくそれに付き合っことになっていくのですが……

その2「行動開始」

「決まってるだろ？デИАーをぶっ潰してやる」

それを聞いた千昭は、思わず腹を抱えて笑い出した。

13歳と14歳のガキがショッピングセンターを潰すだって？

無理に決まってる。千昭はそう思った。

力也是またもやコタツを殴りつけ、ゲラゲラ笑っていた千昭を黙らせた。

「バカみたいな話だがおれは本気だぜ」と力也是言った。

千昭の頭の中は、起動中の洗濯機のように世話しなく動いていた。

潰すって言ったって・・・その方法は？

もし潰せたとしても、いったい何の得があるっていうんだ？

この田舎町で唯一のショッピングセンターなんだぞ？

前髪の色がかったくせつ毛を指でいじりながら、千昭は考え込んでいた。

そんな千昭の様子を見た力也是「ここに居ても仕方ない。行くぞ！」
と言いながら勢い良く立ち上がった。

「お、おい。今からダイアーに行く気がよ……?」千昭はそう尋ねた。

「そうに決まってるだろ！ほら、早く立てよ」力也はそう言って、部屋のドアを開けた。

するとドスンという鈍い音がして、それに続いてかん高い声が聞こえてきた。「いったあゝい！」

力也は廊下に出て、そのあとに千昭もついていく。

するとそこには、千昭の姉である恵が居た。

「なんだ恵か。まさかお前、立ち聞きしてたのか？」と力也は言った。

力也はよく千昭の家に遊びに来るので、恵とも仲が良かった。

二人の口の利き方を見れば一目瞭然である。

「ダイアーを潰すなんていうバカな事始めたんでしょ？」恵はクスクス笑いながらそう答えた。

「まったく……17歳にもなって立ち聞きか。みつともないぞ」千昭は飽きたように言った。

「階段を上ってたら偶然聞こえてきたの！わたし、立ち聞きなんてしないから」

「はいはい。おれたちこれから用事あるから。じゃあな」

「用事？ダイアーを潰しに行くんだっけ？」

「そっだよ。何がおかしいんだ？」

「別に。まあ、せいぜい頑張りなさいね」

恵はそう言つと、自分の部屋に入って行ってしまった。

妙にニヤついていた恵の態度が気に入らなかったのだろうか。

千昭は思わず恵の部屋に向かってこう叫んでいた。

「今に見てる！おれたちがダイアーを潰してやる！」

そう言い残すと、千昭はドタバタと階段を下りて玄関から外に出て行った。

先ほどから黙って恵と千昭の会話を聞いていた力也も、慌てて千昭の後を追った。

背後からは、恵独特の耳障りな笑い声が聞こえてきた。

千昭が外に飛び出したすぐ後に、力也も玄関から出てきた。

「お前もやる気になったみたいだし、行くか！」と力也は言った。

「さっきのはついカツとなって・・・」

「つべこべ言っていないで、ほら、後ろ乗れよ」千昭の言葉は力也に遮られてしまった。

こうして千昭と力也はディーラーに向かい始めた。

千昭の自転車はパンクしていたため、力也の自転車に二人乗りをしている。

15、6件の家が立ち並ぶ小さな住宅街を抜けると、そこからの道は交通量が増えてくる。

千昭たちの住んでいる町は、人口3万5千人ほどのごく小さな田舎町だった。

と言っても、畑や田んぼ、茶畑ばかりが広がっているような田舎ではない。

高層ビルこそ無かったものの、この町にはディーラーという中型のショッピングセンターがあった。

千昭たちの通っている公立中学校の敷地面積よりもディーラーの建物内部の面積の方が広く、3階建てでなかなかの大きさだった。

町一番のショッピングセンターは、町唯一のショッピングセンターでもあった。

そのため客の入りはすこぶる順調で、店内はいつも活気付いていた。

ディアーを潰す、というのは無謀極まりない事だったのである。

力よりも冷静な千昭は、とっくにこの事に気がついていた。

そして二人はディアーに着いた。

自転車を止め、入り口の前に立つ。

そこで力也は立ち止まった。

いったい何を始めるつもりなのだろうか？千昭は不思議そうに力也を見つめた。

力也はスーッと息を吸い込むと、声の限りに叫んだ。

「ディアーなんかぶっ潰してやる！！」

駐車場に向かっていた客たちから、まるで千昭たちが宇宙人であるかのようなそんな目で見られていたが、力也は気にしなかった。

二人が同時に一歩踏み出すと、自動ドアが開き生暖かい風が勢い良く流れてきた。

「まずは作戦会議だ。ついてこい！」

力也はそう言い、先頭を切って歩き出した。

あまり乗り気で無かった千昭も、おずおずと力也についていく。

体格のいい力也の後姿は、いつもよりも数倍大きく見えた。

ほどなく二人は、ファーストフード店に腰を下ろし、それぞれジュースを飲んでいた。

1階の中心は食料品で、奥の方には飲食店があった。

日曜日は特に客が多いファーストフード店だったが、時間帯が3時ということもあり、席に座ることが出来た。

一口カルピスをすすって千昭は尋ねた。

「それで・・・どうする？」

「ここに来てる客たちの信頼を無くすんだ。そうすりればディアーは潰れる」と力也は言った。

「そつだね。信頼を無くす・・・具体的には何をする？」

「それを考えるのは千昭の仕事だ」

千昭は考えた。

ディアーを潰すのは無理だ。それはほぼ間違いない。

しかし今は、何かしら行動を起こさなければ力也が納得しない。

あまり人目につかない方法でディアーを攻撃し、なおかつ力也の気が静まるような作戦……

「ううん……とりあえず今日は、食品コーナーから攻めよう」

「2階と3階は後回しか。いいぜ」

「よし、思いついた。おれはスナック菓子を担当する。力也は炭酸ジュースを頼む」

「ははん。そういうことか！！任せとけ！」

こうして二人は、それぞれの持ち場に向かって走り出した。

その3「事件勃発」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

千昭と力也は、ついにショッピングセンターへの嫌がらせを開始させようとしています。

その3「事件勃発」

千昭は自分の持ち場であるお菓子コーナーにつくと、ポテトチップスの袋を1つ手に取った。

そばには小さな子供が2人いたが、千昭は気にすることなく袋に穴を開けてしまわないように中身を壊し始めた。

千昭の考えた作戦は、ひたすらスナック菓子の中身を潰していくという、ただそれだけだった。

千昭によって細工されたお菓子を買っていった不幸な客は、おやつの時間になって袋を開けたとき初めて中身が粉々に砕かれていたことを知る。

そうなる当然、商品を買った店であるディアーに責任がいく。

これによって客の信頼も崩れ落ちる。千昭はそう考えた。

とても簡単な作業だったが、この作戦には少なくとも2つの問題点があった。

まず1つは時間がかかりすぎてしまう、ということ。

全てのお菓子の中身を潰すとすると、そうとうな時間がかかってしまう。

はるか前方まで続いている陳列棚を見て、千昭は目まいがした。

周りの客に怪しまれ始めるのは時間の問題だろう。

2つめは、何も悪くない客たちまで被害を受けてしまう、ということ。

いくらディアーを潰すためとはいえ、これは千昭の良心を悩ませていた。

自分の考えたこの作戦は本当に正しいのか？ いや、正しいはずがない。

他人のバカな計画に巻き込まれて嬉しがる人間など、どこにもいないからだ。

二つ目の袋の中身を潰し始めていた千昭は、ふと手を止めた。

この作戦は間違っている。おれのやっていることはレベルの低いイタズラだ。

千昭にはそう思えてならなかった。

しかし、大の仲良しである力也がディアーのせいで散々な目にあつたのも事実である。

ここで計画をストップさせ、黙って引き下がるわけにはいかない。

何よりも、それでは力也が納得しないだろう。

千昭は考え込んでしまった。

手にお菓子を持ってうつむいたまま完全に停止している千昭を、小さな子供が不思議そうに見つめていた。

「ねえおにいちゃん。買わないんだったらそのポテチぼくにしてくれない？」6歳くらいの少年が、千昭に言った。

千昭が手に持っているポテトチップスは陳列棚の上のほうに置いてある商品のため、少年は自分で取ることが出来なかった。

千昭は持っていたポテトチップスを渡そうとしたが思いとどまり、棚から同じものを取った。

「はい、これだろ？」千昭はそう言いながら少年にポテトチップスを渡した。

千昭はどうしても、自分が中身を砕いてしまった袋を少年に渡すことが出来なかった。

「ありがとうおにいちゃん！」少年はそう言うと、元気よく走り出した。

千昭は少年の小さな後姿が見えなくなると同時に、力也のいるドリンクコーナーに向かって歩き出した。

千昭は、他人に迷惑のかからない別の作戦を必死になって考えていた。

力也のところに向かっていた千昭は、前のほうで何か騒ぎが起きていることに気がついた。

ゆったりとしたBGMが流れている店内に、ドタバタと耳障りな足音が響いている。

千昭はよく目を凝らして前を見ると、力也と大男がこちらに向かって走ってきているのが見てとれた。

どうやら力也は、警備員に追いかけられているようだ。

何とかして力也を助けなければ。千昭はそう思った。

千昭はとっさに、そばでカートを押していた中年女性に話しかけた。

「すみません！カートを貸していただけませんか？」

女性は戸惑った表情で千昭を見ている。

グズグズしている暇はない。今にも力也は警備員に追いつかれそうだった。

仕方なく千昭は、カートに乗せてあった買い物カゴを女性に押し付けた。

「ちょっと何するのよ？」女性は文句を言ったが、千昭は構うことなく空になったカートを2人が走ってくる方向に押しながら走り始めた。

力也と警備員が、ものすごい勢いで千昭のほうに近づいてくる。

千昭も二人に向かって、速度を落とすことなく走り続ける。

「よける！」力也との距離が約5メートルになったその時、千昭はそう叫んだ。

前から突っ込んでくる力也が右に飛びのいたのを確認し、押していたカートの手を離れた千昭も右に避ける。

警備員も千昭の押していたカートを避けようとしたが、間に合わなかった。

ガシャンと金属的な音を立てると、警備員は体ごとカートに乗り上げてしまい、そのまま勢いは止まること無く近くの陳列棚に突っ込んだ。

分厚いガラスが粉々に砕け散るような音とともに陳列棚は倒れ、商品が次々に床に落ちていった。

周囲の客たちの間からは小さな悲鳴が漏れていた。

その様子を見ていた力也は、警備員の方を指差しながら大声で笑い出した。

力也が近づき「早く逃げよう」と言っても、力也の笑いは止まらなかった。

結局力也は、千昭に引きずられるようにしてディアーを出た。

その4「やる気の有無」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

ついにディアーへの嫌がらせを開始した千昭たち。

しかし作戦は失敗に終わり、事件まで起こしてしまいました。

その4「やる気の有無」

千昭は必死になって自転車をこいでいた。

できるだけ早くディアーから離れなければならない。

千昭は力也の計画に乗ってしまった自分が情けなかった。

小さな田舎町であれだけ派手な騒ぎを起こしてしまったのだ。もう取り返しがつかない。

冷静に考える余裕の無い千昭は、ただただ自宅に向かって足を動かしていた。

この自転車の持ち主である力也は、後ろの席に座ったまま大声で笑い続けている。

こいつにはおれたちのやってしまった事の重大さが分かっちゃいない。千昭はそう思った。

ディアーの姿が見えなくなっただけでしばらく経つと、ようやく力也の笑いがおさまった。

そこで千昭は自転車を止め、力也のほうを見た。

いきなり千昭がブレーキをかけたため、力也は滑り落ちるようになり自転車から降りた。

「なあ力也、これからどうするつもりだ？」と千昭は言った。

力也は千昭から渡された自分の自転車を押しながら歩き始めた。

そのすぐ真横には千昭が歩いている。

「これから？作戦を立て直してディーアを潰す。それだけだ」力也は挑むように言った。

「さっきの騒ぎ、もう忘れたのかよ」

「忘れるわけないだろ。あんな面白いモノ！警備員がカートに乗って陳列棚に突っ込んだ。最高に笑える話じゃないか！」

「ここは小さな町だ。明日にはきつと噂になってる。それでも力也にとつては笑い事か？」

「何でそんなにビビってるんだよ？大丈夫だ。心配ない。あの時と比べたらこんなのマシなほうさ。」と力也は言った。

あの時・・・

千昭にはいくつも思い出せることがあった。

今なんかよりも、もっと危険な状況に追い込まれたことがある。

それも一度や二度じゃない。

そう思うと、千昭は少しだけ冷静さを取り戻すことが出来た。

上級生とケンカした時、教室の黒板に穴を開けた時、学校のマスタ

キーを無くした時。

中学に入ってからだけで（しかも千昭が思い出せる限りで）これだけの事件を千昭たちは起こしていた。

ただしケンカと言っても、相手から仕掛けてきたモノばかりで、千昭たちが自ら殴りかかった事は無い。

黒板に穴を開けた時、ガラスを割った時、鍵を失くした時もただ不運が重なっただけだった。

そのため、校内での千昭と力也はかなりの問題児というレッテルを貼られていた。

確かに千昭たちは、お世辞にも真面目な生徒とは言えない。

遅刻、授業中の居眠りは当たり前で、宿題も出したことが無い。

しかし、教師や周囲の生徒が思っているほど千昭たちは悪い人間ではなかった。

自転車を盗んだ事は無いし、タバコは吸わない。それに、他人をいじめたことも無い。

「千昭、おれたちに足りないモノって何だと思う？」力也が唐突に話しかけてきたので、千昭の思考はそこで途絶えた。

「知恵と権力」と千昭は答えた。

「そんな難しい話はやめよう。おれが足りないと思うのは人手だ」

「そうだな。人数が少なすぎる。たった2人じゃ絶対に無理だ。だからもうあきらめよう」

「何を言ってるんだ。おれは絶対にあきらめないぜ」と力也は言った。

千昭は黙り込んだ。どうにかしてあきらめさせなければ・・・

これ以上待っても、千昭からの返事が返ってこないことに気づいた力也は言った。「明日学校で、手伝ってくれるやつを探す」

千昭は顔を上げ、力也の顔をまじまじと見つめた。

力也と仲のいいやつなど千昭くらいだ。

ディアーを潰すという大それた計画に付き合ってくれる人間などいるはずがない。

いや・・・いた。

「それって・・・」千昭は小声で言った。

「ああ、そうだ。あの3人を誘う」力也は満面の笑みを浮かべてそう言った。

分かれ道につき、そこで力也と別れた。「じゃあな」「バイバイ」

千昭は一人で、とぼとぼと自宅に向かう。

力也の言った「あの3人」とは、真希、優一、薫のことだろう、と千昭は思った。

小学生の時、いつも一緒に遊んでいた5人。

みんな同じクラスでとても仲の良かった5人。

今では、同じ学校にいるのに話すことさえなくなってしまった5人。あんなに仲が良かったのに、なぜ中学に入った途端話さなくなったのか。千昭は考えた。

それは間違いなく、クラス替えのせいだろう。

千昭と力也は同じクラスになったが、他のみんなはバラバラになった。

そのため、時間が経つにつれ顔を会わせる機会が減っていつてしまったのだ。

明日力也は、1年と半年もまとともに会話さえしていない3人に、いきなりこう言うのだろう。

『ダイアールを潰すから手伝ってくれ』

そこで千昭は気づいた。

もしその誘いを3人が断ったなら、力也はきつと計画をあきらめる。

つまりあの3人なら、暴走している力也を止める事ができる。

これ以上先に進ませると力也は少年院に入ってしまう。千昭は、今ではそう考えていた。

千昭はこぶしをギュッと握り締め、強く決心した。

明日が勝負だ。力也をあきらめさせる最後のチャンス。絶対に力也を止めてみせる。

その4「やる気の有無」(後書き)

読んでくれてありがとうございます。
まだまだ続きます！

その5「再会」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

ディアーつぶしを見事に失敗した千昭と力也。

二人では無理と判断した力也は、仲間を増やすことを思いつきます。

その5「再会」

「よし千昭、ついてこい！」

力也が行動を起こしたのは、昼休みになってからだつた。

『協力者を探す』と力也が宣言してから、22時間が経過している。

「ああ行こうぜ」と、千昭は力強く言った。

2年4組の教室から、力也と千昭が続けて出て行く。

目指すは2年3組。すぐ隣だ。

力也はノックもせず3組のドアを開けた。

ドアと壁とが激しくぶつかり、大きな音をたてる。

千昭は深く息を吸い込んだ。力也を止めてみせる。なんとかしても。

力也の後から千昭も3組に入っていく。

教室には、1つの机に群がってお喋りをしている女子が4人と、宿題をしているらしい男子が1人いた。

千昭と力也の姿を見るなり、4人の女子たちは逃げるように教室から出て行った。

「よお優一！」力也が、教室に残っている男子生徒　優一に声を

かけた。

ドアを開けたときに大きな音がしても顔を上げなかった優一は、その時初めて千昭たちのほうを見た。

やせ細った優一の顔からは、驚き、恐怖、喜び、戸惑いなど複数の表情が見てとれた。

「ひ、久しぶりじゃないか。力也、千昭・・・」と優一は言った。

一年と半年ぶりに言葉を交わした優一に対して、力也は唐突に話し始めた。

「おれたちに協力してくれ」

そしてここから、千昭と力也の見えない戦いが始まった。

結果から言えば、千昭の完敗だった。

お人好しすぎる優一は、力也の話を一通り聞き終わると「手伝うよ」とただそれだけを言った。

力也が熱弁を振るっている間、千昭はアイコンタクトやジェスチャーで自分の思いを伝えようとしたが、それを見た優一はただニツコリと笑っただけだった。

力也と優一が昔話に花を咲かせているのを見た千昭は「すぐ戻るか

ら待つててくれ」と言い残すと、3組から飛び出した。

千昭は小走りで1組へ向かった。

次に力也が訪ねるはずの、真希と薫のいる1組へと急ぐ。

事前に反対してくれるよう頼んでおけば、力也をとめることが出来るはず。千昭はそう思った。

1組のドアを勢いよく開けると、そこには10人ほどの女子がいて、いっせいに千昭のほうを見た。

薫の姿は無かったが、女子のグループの中に真希がいた。

「真希の顔見るの久しぶりだな」と千昭は言い、小さく手を振った。

他の女子には目もくれず、まっすぐ真希のほうに歩いていく。

真希の周りにいた女子たちはクスリと笑って目を合わせると、教室の隅に移動した。

「千昭くん・・・どうして？」顔をリンゴみたいに真っ赤にした真希は、ほんの少し千昭のほうを見上げながらそう言った。

久しぶりの再会が突然に訪れたためか、真希は混乱しているようだった。

「あ、いや、えっと・・・」何と切り出して言いか分からない千昭はどもってしまった。

教室の隅にいる女子たちは、中央に立っている千昭と真希を見てクス笑っている。

「久しぶりに会ったばかりなのにこういふ話はどうかと思うが、まあ聞いてくれ」と千昭は言った。

今度は笑い声ではなく、「おおー」という声が千昭の耳に聞こえてきた。

「悪いけど2人で話したいから出てってくれないか？」我慢できなくなった千昭は、たまっている女子に向かって言った。

女子たちは、残念そうな顔をして教室から出て行く。

そのうちの何人かは、真希に向かって親指を立てたりウインクしたりしていた。

教室に2人きりになると、真希は言った。「話ってなになかな？」声がうわずっている。

「とても大事な事だからよく聞いてくれ」千昭はそう言うと、真希の顔をまじまじと見つめた。

真希の髪、だいぶ伸びたな、と千昭は思った。

相変わらず背は低いままだったが、昔とはどこか雰囲気が変わっている。

真希は当時よりもずっと大人っぽくなっていた。

一年以上の空白があったのだから、当然のことなのかもしれない。

しかしその反面、昔からの可愛らしさは今でも衰えていない。

さらに磨きがかかっている、と言っても過言ではないだろう。

「実は」「は、入っちゃダメ！」

千昭が話し始めようとした時、廊下から悲鳴に似た声が聞こえてきた。

そのすぐ後にドアが開く音。入ってきたのは力也と優一。

間に合わなかった・・・千昭は思わず自分の手のひらにこぶしを殴りつけた。

「抜け駆けか。千昭らしくないな」と力也は笑いながら言った。

「抜け駆けなんかしてない」千昭はきつい口調で言った。

「わあ、力也くんに優一君！今日はみんなしてどうしたの？」と真希は言った。

その目はキラキラ輝いていたが、どこか残念そうな表情をしている。

「真希、お前に話があったて来た」と力也は言い、その後に優一に語った内容とほぼ同じ大演説をやったのけ、あっさり真希を見方に引き込んだ。

事前の打ち合わせが出来なかった千昭は、文字通り惨敗した。

しかし千昭は、本当のことを言うと優一と真希にはほとんど期待していなかった。

この2人はとても優しい性格で（悪く言えばお人好し）誰かが困っているとそれを見過ごすことが出来ないような、そんな人間なのだ。

千昭が本当に期待しているのはメンバーの最後の1人、遠峰薫である。

お人好しとはほど遠く、いつも冷静でとても賢い。

この場を救うのに一番適しているのは彼女だ、と千昭は思っていた。

昔5人で遊んでいた時のリーダーは力也だったが、一番しっかりしていたのは薫で、一番頼りにされていたのも薫だった。

千昭は薫に対して、絶大な信頼を寄せていた。

一年以上話しさえしていないが、いまだにそれは変わっていない。

昼休みの終わりのチャイムが鳴り、千昭、力也、優一は教室を出た。

「放課後に薫を誘いに来るから、帰らせないでくれよ」と真希に向かって力也は言い、4組に戻った。

もちろん千昭も4組に、優一は3組に帰っていった。

一年と半年ぶりの再会はなんともあっさりしたものだっただ、と千昭は思った。

普通ならもっとこう、感動的な何かがあってもいいんじゃないか？

いやいや、おれたちに普通の再会なんて似合わない。

小学生の時の数々の伝説が、おれたちが普通じゃない事をきっちり証明している。

千昭は少しばかり昔の思い出に浸っていたがすぐに正気に戻り、次の戦いに備えようとした。

薫が千昭と力也のどちらを選ぶのか・・・全てはそこに懸かっている。

こうして千昭と力也の戦いは、薫がレフェリーの最終ラウンドを迎えようとしていた。

その6「全員集合」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

昔の友達である優一、真希、薫を仲間に引き込もうとしている力也と、それを阻止しようとする千昭。

その勝負の行方は・・・？

その6「全員集合」

金槌で殴られたような衝撃が頭の中を駆け抜け、千昭は目を覚ました。

頭を押さえながら顔を上げると、そこには力也が立っていた。

「急がないと薫が帰っちまう。先に行ってるからすぐ来いよ」と力也は言い、1人で教室から飛び出していった。

千昭が寝ている間に6限目も帰りの会も終わっていたらしい。

千昭は机の横に提げていたカバンを手に取ると、力也の後を追った。

慌てて校舎を出ると、校門のそばに力也たちの姿を見つけた。

他の生徒をかき分けるようにして力也たちのそばまで行くと、そこには懐かしいメンバーが揃っていた。

力也、優一、真希、薫、そして千昭。

昔の思い出が一気に蘇ってくる。

はげ山のお化け屋敷、秘密基地、映画館、夜の学校……

いけない。千昭は頭をふった。

こんなことを考えている場合ではない。

すでに千昭と力也の最終ラウンドは始まっている。

「薫は物分りが良いから率直に言わせてもらおう。ディアーを潰すのに協力してくれ」と力也は言い、祈るように薫を見た。

同じように優一と真希も、薫を見つめている。

薫は一瞬面食らったような顔をしたが、すぐにこう言った。

「あなたたち、全然変わってないのね。悪いけど協力できないわ。弟たちの世話で忙しいし」

そして薫は、千昭のほうに優雅な笑みを向けるとそのまま校門を出て行ってしまった。

その時の薫は、千昭をからかっていたために無邪気な表情をしていたが、完璧なほどの美しさと彼女独特の品格も持ち合わせていた。

4人はしばらくの間、薫が去っていった方を見つめて黙っていた。

薫は千昭と力也のどちらにも味方しなかった。

そのため、この勝負はすでに優一と真希を味方につけている力也の勝ちなのだろう。

千昭は小さくため息をついた。

ここで強引に止めようとしても、力也は絶対に言うことを聞かない。

おれだけでは説得力に欠けるからだ。

薫ならこのピンチを救ってくれるはずだったのに。これからどうすればいいんだ？

千昭が考え込んでいると、力也が言った。

「4人でも何とかなるだろ」

千昭はしぶしぶ、3人は意気揚々とディアーへと向かった。

ディアーに入る直前、力也はカバンから黒い帽子を取り出し、それを深々と被った。

昨日事件を起こしたばかりだ。力也にもそれくらいは分かっているらしい。

千昭は顔を見られていない自信があったため、何も被らずディアーに入った。

和やかな音楽が流れている店内は、いつもと何ら変わりはなかった。

「ねえ力也くん、どうやってディアーをやっつけるの？」と真希は目を輝かせて言った。

まだ幼い子供みたいな真希の笑顔を見た千昭は、落ち込んでいた気分が少しだけ軽くなった気がした。

「昨日と同じ、食品コーナーに行こう」と力也は言い、全員の顔をグルッと見回した。

優一と真希は大きくうなずき、千昭は小さくうつむいた。

しばらくの間、ただ歩いているだけだった4人は、千昭の一言でピタリと立ち止まった。

「あのおじさん見てみるよ。あれって万引きじゃないか？」

3人はその方向を見ると、思わず目を見開いた。

視線の先に居た中年の小柄な男は、特に周囲を警戒することもなく陳列棚から商品を取り、それをだぶついているズボンのポケットに次から次へと入れている。

「そうだ！おれ達もあのおっさんに協力してやろうぜ」と力也が言ったのと同時に、真希が中年の男に近づいて大声で叫んだ。「このひと万引きしてます！」

真希の透き通った声が店内に響き渡り、どこからともなく警備員達の足音が近づいてくる。

中年男は驚いた様子で真希を見ると、慌てて出口に向かって駆け出した。

「おい真希！」と力也は叫び、怒りの表情をあらわにして何か言いかけたが、向こうから走ってくる警備員の姿を確認したため、さらに深く帽子を被って黙り込んだ。

「優一、あいつを追いかけろ！」昨日よりはいくらか冷静だった千昭はそう言うと、優一の背中を押した。

このままだとあの中年男に逃げられてしまう。

しかし優一の足があれば取り逃がす事は無いはずだ、と千昭は思った。

優一は小柄なわりに、昔から走るのが大の得意だった。

「わ、分かった」優一はそう言い終る前に、すでに男の後を追って走り出していた。

優一は、普段はとても大人しい少年だが、走る時になるとその性格が一変する。

千昭の予想通り優一はすぐに追いつくと、後ろから体当たりして男と一緒に床に倒れこんだ。

店内はざわつき、二人の周りに客が集まってくる。

すぐに警備員もやって来て、男は取り押さえられた。

2人の警備員に挟まれるようにして男は去っていき、優一も警備員に呼ばれその後についていった。

残された千昭と真希は、先ほどから姿の見えなくなっていた力也を探し始めた。

力也は騒ぎのあった場所から離れ、自分の身長よりも少し高い陳列棚の前に立っていた。

しばらく考えた末にお菓子を一つ手に取ると、それをゆっくり自分のカバンに入れ始めた。

今なら騒ぎのおかげでバレはしない、と力也は思った。

ディアーに直接のダメージを与えるのに効率のいい方法、それは万引き。

しかし万引きというのはもちろん犯罪で、力也もそれぐらいは分かっていた。

いくらディアーを潰すためとは言え・・・

力也はカバンに入れた商品をもう一度取り出し、しげしげと眺めた。

ディアーのせいで散々な目に遭った。何としてもここを潰したい。だが、万引きなんておれの性分に合わない。

力也の頭の中では、可愛らしくない天使と恐ろしすぎる悪魔の戦いが繰り広げられていた。

やがてその戦いに決着がつこうとした時、よく知った声が力也の耳に聞こえてきた。

「あなた、いつからそんなコソ泥みたいな真似をするようになったの？」

声の聞こえたほうに顔を向けると、そこには薫が立っていた。

「まだ盗んでねえよ。ここで何してんだ？」今度は力也が尋ねた。

「夕飯の材料を買いに来たの。その手に持つてるお菓子、買わないんだったら戻しなさい」

それを聞いた力也は、手に持っていた袋を素直に陳列棚に戻した。

年の近い人間に屈する事など全くと言っていいほどない力也だったが、薫に対してだけは違った。

彼女は別次元に住んでいるような美しさの持ち主で、堂々とした気品があった。

女性に関心の無い力也でも、薫と二人きりになると緊張してしまう。

彼女が手に持っている買い物カゴは別にしても、薫はまるで女王様のような雰囲気をつけていた。

しかしその容姿があまりにも綺麗すぎるためか、薫は友達が少なかった。

近寄りがたい存在なのだろう、と力也は思った。

一度も話したことがないやつは、薫の事を誤解している。

彼女は変に気取ったりしないし、自分の美しさを自慢する事もない。

本当はとてもしいい奴なのだ。

だから力也は、薫のことが好きだった。(そういう意味ではない)

先ほどまで厳しい顔をしていた薫だったが、ふいにその表情を和らげると力也に近づいてきた。

肩の辺りで美しくカールしている黒髪が、ふわふわとゆれる。

力也は、ただ歩いているだけの薫に惚れ惚れしていた。

他の誰にも真似できないほどの優雅さを、薫は持っていた。

すぐ目の前まで来た薫は、その細くて白い腕を精一杯伸ばしながら、中指で力也の被っている帽子をはじいた。

「そんなに深く被って・・・殺し屋にでも狙われてるの？」薫は、クスクス笑いながらそう言った。

「薫じゃないか！二人で何してるんだよ？」

千昭はそう叫ぶと、真希と一緒に二人に向かって走り出した。

そのすぐ後に優一も合流し、再び5人が揃った。

そして力也が口を開く。「もう一度頼む。おれたちに協力してくれ」

4人の顔がいつせいに薫のほうを向いた。

少しの間があり、小さくため息をついた薫はこう言った。

「しょうがないわね。あなたたちが問題を起こさないようにわたしが見張ってあげる」

力也、真希からは大きな歓声があがり、優一はニコニコ笑っている。

千昭は思いつきり落胆したが、薫の意味ありげなウインクに気づき気を取り直した。

その7「作戦会議」(前書き)

〜前回までのあらすじ〜

ディアーというシヨッピングセンターを潰すため、メンバーを増やしていた千昭と力也。今後の計画を練るため、メンバーは昼休みに会議をします。

その7「作戦会議」

薫の参加が決まった次の日の昼休み、5人は2年3組に集まっていた。

「何か作戦を考えてきたやつはいるか？」力也はそう言って4人の顔を見回した。

「はい！」真希が元気よく手を上げた。「ディアーの中で鬼ごっこをするのがいいと思います！」

それを聞いた千昭と力也は、思わず笑い出してしまった。

「そ、そうだな、真希。いい考えだと思うぞ」と力也はゲラゲラ笑いながら言った。

真希は、何がおかしいんだろう？とでも言いたげな顔をしている。

真希らしい発想だ、と千昭は思った。

彼女は昔から、妙に子供っぽい思考の持ち主だった。

薫がものすごく大人びているのに対し、真希はその正反対。

二人ともかなりレベルの高い美人であることには違いなかったが、タイプは全くの別物だった。

「薫、何か考えてないのか？」と千昭は聞いた。

そしてここから先は、千昭と薫の用意した台本どおりに事が進んでいく予定になっていた。

というのも実は昨晚、二人はちょっとした打ち合わせをしていたのだった。

「はい、遠峰です」受話器の向こうから薫の声が聞こえてきた。

「あ、薫？おれだよ。千昭」

「まだ電話番号覚えてたのね」

「ああ。薫と二人で話すのって久しぶりだな」

「これからは毎日話せるんじゃない？」

「おまえも力也の計画に加わったからな」

「千昭を助けるためよ。感謝しなさい」

「おれが乗り気じゃないこと、分かってたのか？」

「ええ。だってあなた、昔から怠け者じゃない」

千昭はふと後ろを振り返ると、そこにはニヤついている恵が立って

いた。

「また盗み聞きかよ。ほら、あっち行けって」と受話器を手で押さえながら千昭は言った。

「なによ偉そうに。お母さんお母さん！千昭が女の子に電話してる！」と恵は大声で言い、キッチンに走って行こうとした。

千昭は慌てて恵を止めた。「わるい薫。ちょっと待っていてくれ」「えっ!?!」

「ややこしい事にしようとするな」と千昭は言った。

「分かった。しない。でもその代わりに、1つお願いがあるの」と恵は言った。「今日学校で少し聞いたんだけど、あんたたち昨日、デイナーで大暴れしたらしいじゃない!」中学生ぐらいの男の子二人が警備員と追いかけてこした。すぐに千昭と力也の事だってピンときたわ。それでお願いなんだけど、私も仲間に入れてくれない?」

「やっぱり噂になってたか。おまえを仲間に入れろだって?無理だよ」

「そう。お母さ」「分かった分かった。今電話中だからあとで話そう」と千昭が言うと、恵は素直に2階に上がっていった。

「薫?まだ切ってないよな。待たせてごめん」

「いつ以来かしら?人に待たされたのって。恵さん、相変わらず元気みたいね」

「元氣すぎて困ってるよ。それで明日のことなんだけど」

「ちゃんと考えてるわよ。力也がディアーで大きな問題を起こす前に、戦いの舞台を変えるの」

「他の事に夢中にさせて、ディアーを忘れさせるってことか!」

「そのとおり。じゃあ、また明日ね」

「ちょっと待てよ!どうやって力也の注意をそらすんだ?」

「もうすぐ生徒会選挙があるでしょ。バイバイ」

電話を切った後、千昭は考えた。

薫の作戦は良いと思うが、いったいどうやってディアーと生徒会選挙を結びつけるんだ?

まあ、おれの考えることじゃないか。薫に任せておこう。

「わたしたちが噂を流すの。ディアーはひどいところだ、ってね。」
と薫は言った。

力也は、少し考えるようなしぐさを見せてからこう言った。「でも誰がおれたちの話を信じてくれるんだ?おれと千昭は世間からの評

判が悪い。優一と薫は1匹狼だし。ああ、真希ならいけるかもな」

「そう。真希よ。この中で一番まともなのは真希。ちょっと抜けてるところはあるけど、わたしたちみたいなきれ者じゃないわ」と薫は言った。

ズバズバものを言うやつだ、と千昭は思ったが黙って事の行方を見守った。

「確かに真希は嫌われ者じゃないが、大人たちが完全に信じてくれるような立場の人間じゃないだろ？」

「今のままだったらね。でももし、真希が生徒会長だったら大人たちも話を聞いてくれるんじゃないかしら？」そう薫は言い終わると、これでどう？と言わんばかりの顔をして千昭を見た。

千昭も薫を見返し、小さくうなずいた。

あっぱれ。薫は見事にディアーを潰す計画と生徒会選挙を結びつけた。

千昭はただ感心するばかりで、何も言うことができなかった。

真希が生徒会長になったからといってディアーが潰れるわけではない。

しかし、力也をディアーから引き離すにはそれで十分だった。

「なるほどな」力也は何か考え込んだ様子でそう言った。

「ちよ、ちよつと待ってよ！あたしが立候補するの！？」と真希は言った。

真つ赤な顔がそわそわと動いているため、ポニーテールも左右に揺れている。

「心配するな。おれたちが応援するから、真希なら絶対大丈夫だって」千昭はそう言うと、真希の顔をまじまじと見つめた。

真希は顔を伏せ、大きく息を吸った。

4人の顔が不安そうに真希を見つめる。

永遠とも思える数十秒が通り過ぎた後、真希はこう言った。

「分かった。みんなが応援してくれるんなら、あたし頑張る！」

「これで決まりね。どう、力也？」と薫は言った。

「よし、それでいいぞ。真希を生徒会長に当選させる」と力也は言っつて少しの間を空けた後、こう付け加えた。

「ただし今日の放課後にもう一度だけディアーに行つて、それでダメだった時は薫の考えた作戦でいく」

その8「直接対決（前編）」（前書き）

（前回までのあらすじ）

ディアーというシヨッピングセンターを潰すという無謀な計画を諦めようとしない力也を、千昭と薫は懸命にやめさせようと説得しますが・・・

その8「直接対決（前編）」

放課後になり、5人はそれぞれ家に帰った。

そして今度は、学校ではなくディアーに集まる予定になっている。

千昭は帰宅すると堅苦しい制服を脱ぎ捨て、歩いてディアーに向かった。

「千昭、遅いぞ」ディアーの入り口に立っている力也が言った。

「歩いてきたからな。他のみんなは？」と千昭は言った。

「あいつらならとっくに始めてるよ」

「はあ、そうか。で、どんな嫌がらせをしてるんだ？」

「これ」力也はそう言うと、ポケットから白色の丸い石ころみたいなものを取り出した。「こいつを使う。とりあえず中に入ろう」

「なんだこれ？」

「商店街の駄菓子屋で買ったんだ。知らないのか？踏んづけたらバツッて音がするやつだよ。爆竹みたいな感じだな」

「これをおれに持たせてどうしようっていうんだよ？」

「ディアアの床に落としていけばいい。それだけだ」

こんな小石みたいな物を床に落としたって誰も踏みはしないだろう、と千昭は思った。

しかし、すぐにそうでも無いという事に気がついた。

ディアアの床も真つ白なため、この小型爆弾が目立つことは無い。

力也はせっせと、千昭は仕方なく罾を設置していった。

薫はエレベーターの中に1人きりで突っ立っていた。

カートが2台も入っているため、エレベーターの中はぎゅっぎゅっである。

薫は小さくため息をついた。何でわたしがこんなことを。

「真希と薫には簡単な仕事をやってもらう」今から約10分前、力也はそう言った。「この2台のカートと一緒に、エレベーターに入ってきてくれ。それだけでいい」

「ええ！？そんなのつまんない！」と真希は言った。

「じゃあおれたちと一緒にこれ仕掛けるの手伝うか？」

「うん、そっちのほ」「真希、行くわよ。カートに何か入れておきなさい」薫は慌てて真希の言葉をさえぎった。

今の力也を止めることは不可能だろう、と薫は思った。

薫がそう判断するしかなかったほど、力也のやる気は凄かった。

彼はメンバーにできばきと指示を繰り返し、数年前と同じく見事リーダーの座に返り咲いている。

せめて真希だけでも力也に巻き込まれないようにと、彼女の背中を押しながら薫はエレベーターに向かった。

そして今、薫はエレベーターの中にいる。

力也の考えたこの作戦の意図を、薫はすでに理解していた。

デИАーにあるエレベーターは全部で4つ。

3階建てのためか、エレベーターを利用する客は意外に多い。

4つのうちの2つを、薫と真希は満員状態にしていた。

全体の半分のエレベーターがふさがっているので、かなりの迷惑になる。

力也の考えたこの作戦は、とても簡単で効率の良いものだった。

今ごろ力也たちは仕事に取り掛かっているころだろう、と薫は思った。

彼らは自分たちのことに集中している。

今わたしが持ち場を離れたとしても、力也にバレることはない。

すでに10分間はこうしてエレベーターの中に立っている。

何人かの大人たちからは不審な目で見られた。

もうそろそろやめておかないと、警備員に捕まってしまう。

ちょうど1階にいた薫は、2台のカーツを押してエレベーターを降りた。

そして薫が隣のエレベーターに近づいた時、どこからともなく『パ
ンツ』という大きな音が聞こえてきた。

千昭と力也、そして優一はせっせと小型爆弾を設置していた。

近くにいる大人たちからはジロジロ見られている。

「全部仕掛け終わったよ」と優一は言った。

ほぼそれと同時に、千昭たちのすぐそばで『パンツ』という音がした。

「どっかのマヌケが引っかかったな」力也は拳を握りしめながら嬉

しそつに言った。「じゃあ優一、真希たちのところに行っておいてくれ。おれたちもすぐに行くから」

「分かった。それじゃ、またあとで」優一はそう言うと、千昭たちから離れていった。

それから数分間は何の問題も起こらなかったが、小型爆弾が作動する回数は徐々に増えていた。

「よし、おれも終わったぜ」と力也は言って、千昭の方に近づいてきた。

「またお前たちか！」不意にどこからともなく、あの警備員の低い怒号が聞こえてきた。

千昭は頭を上げて後ろを振り返った。

するとそこには、ものすごいスピードでこちらに近づいてくる大男の姿があった。

千昭たちのイタズラを目撃した大人が、警備員を呼んだらしい。

「バレちゃった。逃げる千昭！」力也はそう言うと、千昭の背中を押しして走り出した。

背後からは警備員の鈍い足音と、小型爆弾のはじけるような爆音が聞こえてくる。

千昭と力也は懸命に走った。

「どいてくれどいてくれ！」力也はそう叫びながら千昭のすぐ隣を走っている。

時間帯が夕方のためか、通路は買い物客であふれていた。

客たちは千昭と力也の姿を見るなり、慌てて通路の脇へ飛びのいた。

警備員との距離は少しずつ縮まってきている。

千昭の足は、そろそろ限界が近づいていた。

もう200メートルは全力疾走している。これ以上は無理だ。

「千昭、右だ！」と力也は叫んだ。

かろうじてその声を聞きとった千昭は、力也に合わせて右に曲がった。

千昭たちが急にコースを変えたため、警備員はそれに対応する事ができなかった。

そのままスピードを緩めず、警備員は数日前と同じく再び陳列棚に突っ込んだ。

千昭と力也は立ち止まり、息を弾ませながら振り返った。

床のあちこちには缶詰が散らばっていて、その中に警備員が埋もれている。

店内がざわつき始め、客が集まってきた。

千昭と力也が再び走り出そうとした時、トロールのような大声が背後から聞こえてきた。

「待て小僧ども！よくもやってくれたな」

缶詰の山がグイッと盛り上がり、その中から大男が姿を現した。

千昭と力也はそれを見るなり、大急ぎで走り出した。

薫は、隣のエレベーターから出てきた人物を見て驚愕していた。

そこには真希がいるはずだったが、出てきたのは40台前半の女性だった。

「あの、そこにわたしぐらいの女の子が乗ってませんでしたか？」と薫は聞いた。

「ついさっきまでは乗ってたんだけど。店長さんに連れられて行ったわよ」と女性は言った。

ああマズイ、と薫は思った。真希が店長に連れて行かれたって？

「そうですね。ありがとうございます」薫はそう言つと、真希を救出する作戦を考え始めた。

早く助け出さなければ、アホな真希は店長に何を喋ってしまうか分かったものじゃない。

口を滑らせて住所なんて言ってしまったら、面倒なことになる。それこそ警察沙汰だ。

「薫、こんなところで何してるの?」と、いつの間にか目の前まで来ていた優一は言った。

「大変なことになったわ。真希が店長に捕まったの」と薫は言った。

「そんなあ。どうする?」

「今考えてる。とにかくあなたは千昭たちを呼んできて。わたしはカートを片付けるから」

「分かった」優一はそう言うと、目にも止まらぬ速さで去っていった。

「2階に逃げよう。エスカレーターを使うぞ!」と力也は言い、エスカレーターを駆け上がり始めた。

千昭も後に続き、必死になって走る。

エスカレーターを半分ほど上がったところで、力也は立ち止まってしまうた。

前方にはたくさんのお客がいて、これ以上先に進むことができない。

千昭は後ろを振り返った。

追いかけてきていた警備員は、いつの間にか4人になっている。

「ヤバイぞ！どうする？」と力也は叫んだ。

「反対側だ、飛べ！」千昭はそう言い、力也の腕をつかんで隣のエスカレーターに飛び乗った。

『下りる』専用のエスカレーターを必死に駆け上がり、やっとのことで2階についた。

すぐ後ろからは、警備員たちがすごい勢いで逆走してくる。

千昭は大きく息を吸い込み、再び力也と走り出した。

（後編に続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542g/>

子豚にジュエリー

2010年11月5日13時26分発行